

対馬学フォーラム 2018 報告

古茂田 香

1. はじめに

対馬学フォーラムは 2018 年 12 月 9 日に対馬市の対馬交流センターで行われた、対馬に関する研究や実践活動の成果、今後の構想などを発表する場であり、年に 1 回開催されている。今年には 52 本のポスター発表が集まったという。ここでは発表だけでなく、同会場内で対馬沿岸磯焼け対策研修会が主催する、磯焼けの主な原因である食害魚を活用した料理の試食会や、対馬の高校生を対象に島外の大学による出張型オープンキャンパスも開催された。

2. 特別報告

午前は、今回の対馬学フォーラムの特別報告として 4 本の発表が行われた。

発表されたのは、筑紫女学園大学現代社会学部の佐々木浩教授の「対馬のカワウソ」、長崎県立対馬高等学校ユネスコスクール部の「ツシマウラボシシジミの保全活動」、明治大学自動運転社会総合研究所の萩原一郎特任教授の「自動運転社会を通じた地域の持続的な発展」、九州大学大学院工学研究院の清野聡子准教授の「対馬沿岸の磯焼けなど環境変化への対応と問題解決にむけて」の 4 本であった。特に私たちが夏に対馬で行ったアクションリサーチの際に、対馬高校ユネスコスクール部と共にツシマウラボシシジミの保全活動を行ったので、部員たちのその後の活動や、これからの動向や、想いが聞けてうれしく思った。

3. ポスター発表

午後からはポスターの出展者がそれぞれで作成したポスターの前に立ち、他の参加者や来場者に閲覧してもらいながら質問に答えたり、意見を交換を行う時間であった。ポスター番号の奇数と偶数で前半と後半に分けられ、1 時間半ずつ時間が設けられた。

私たちは「大学生による対馬アクションリサーチの意義」というテーマでポスター発表に参加した。夏に立教大学 ESD 研究所の阿部治所長と、立教大学社会学部現代文化学科の学生 5 人で対馬に 5 日間滞在し、現地でしか体験できない様々な活動を通して初めて知ることや感じたことが多くあった。この経験から私たち学生の対馬に来る前後での意識、考え方はどのように変化していったのか、アクションリサーチを行う意義とそれがもたらす影響について考察したことをポスターにまとめた。今回は行った活動の中から「自然保護活動」、「佐護地域での民泊」、「佐須奈、仁田小学校による総合学習」、「小学校での平和学習」の 4 つを挙げ、それぞれの具体的な活動を記載した。これらを経て、私たち学生は対馬の抱える課題やそれらの実態を知り、それをどう解決していくか考えさせられると同時に、対馬の魅力である豊かな自然や人々の温かさを身をもって感じた。このアクションリサーチの意義は、現地での経験や素材を活かし、その地域の直面している課題の解決法を考えられることであるとした。

本アクションリサーチ中にお話を伺った方やお世話になった方々をはじめ、多くの方にポスターを見ていただくことができたので、それだけでも達成感があった。またこのポスターと共に対馬高校との共同プロジェクトである、ツシマウラボシシジミ保全のためのピンバッジの作成について、ピンバッジの価格設定のアンケートを行った。このピンバッジの作成に関しては、価

格に合わせた付加価値をつけることや、購入者にその後の保全活動にどのように売り上げが活かされているかを報告できる制度の導入等、様々な意見や質問をいただいた。このような意見を頂ける場はなかなかないので、今回得られた声はピンバッジの作成に反映させたいと考えている。

4. 出張オープンキャンパス

今回の対馬学フォーラムでは、島外に出て各大学のオープンキャンパスに訪れることが難しい対馬の高校生のために、フォーラムに参加している大学生がパンフレットを配ったり、勉強や学部についての質問に答えたりと出張型の大学説明会が同時に開催された。我々も立教大学の代表として、高校生からの疑問に答えたり、大学はどういったことができる場なのかを説明したりした。多くの高校生が立教の外観や学部に興味を持ってくれたようで、パンフレットが足りなくなるほどの盛況ぶりであった。島外の、さらに関西や関東などの離れた地域の大学について知る機会はほとんどないので、対馬の高校生にとって有意義な時間になっていれば非常に喜ばしいことである。彼らにとって都市部の大学に進学することは勇気がいると思うが、そこで生活することにより、対馬の魅力の再確認に繋がり、島に戻ってくる若者の増加のきっかけになるかもしれない。そういった意味でもこうした大学の説明会は良い取り組みであると感じた。

5. まとめ

この対馬学フォーラムに参加することで、対馬が島外の人々にも注目されている地であることがよくわかり、それだけ対馬には多様な資源や大きな可能性があるのだなと思った。私たちも対馬の魅力に惹かれ、活動を契機に様々なことを考えるようになった人々のうちの一人である。今後も対馬にしかないものや、地球の人の温かさで対馬に関心を持つ人が増えること、また対馬学フォーラムは研究や調査を含め、対馬の良さを発信する場になっていくことを願っている。

(こもだ・かおり 立教大学社会学部現代文化学科 3年 阿部治ゼミ)

大学生によるリアクションリサーチの意義

立教大学社会学部3年 阿部治ゼミナール 布井佑紀、古茂田香

はじめに

今年の8月6日～10日の5日間、対馬市において、立教大学ESD研究所の阿部治所長と現代文化学科の学生5人でアクションリサーチを実施した。対馬では、学校の統廃合が進む地域での暮らし、豊かな自然に囲まれる中で生き物と共生するために地域の人々が行っている活動、ESDを中心とした小学校の総合学習など、現場での体験を通じて初めて知ることが多かった。このように、普段都市部に暮らす私たち学生が対馬に来る前と後ではどのように意識・考え方が変化していったのか、アクションリサーチの意義やそれがもたらす影響について考察していきたい。

・自然保護活動

ツシムウラボシジミの食草であるケヤハギの苗を植える活動を行った。森の中の防鹿柵で囲われた保護区域で、本学の学生と対馬高校の生徒、総勢30名ほどで蝶の食草の一つであるケヤハギを植えた。活動後には野生のツシムウラボシジミを観察することができた。さらに元々は更地であったところを耕し、水を引いて傾斜をつけたりして作られた人工的な湿地、ビオトープではどんな生き物がいるかを探し、観察するという作業を行った。このビオトープは周辺の環境の生態系の維持に役立っており、野鳥が生きられるような環境にもなっている。また「佐護ヤマネコ稲作研究会」では対馬の2大米どころである佐護で生き物と共生する農業を目指し、ここに多く生息しているツシムヤマネコをモチーフに「ヤマネコ米」を作る活動をしている。なるべく農業を使わない減農薬でお米を栽培することで、ヤマネコをはじめとする様々な生き物が住み着きやすい環境を作り、消費者にも安心安全なお米を提供できるという。

・小中学校の統廃合が行われた佐護での民泊

佐護地区で民泊をしている平山ご夫妻の民泊「恵」で二泊三日お世話になった

地域の人たち
へのヒアリング
調査

釣り体験

対馬の郷土
料理

地域の人たちにとってのあたりまえ
私たちにとっての非日常

都心で暮らしてはわからない島での暮らし、また小中学校の統廃合が行われたような過疎地域にすむ人々の思いなどが対話を通す中で実際に感じる事ができた。そこには私たちが授業を聞くだけでは決してわからなかったこと、感じる事ができないことがあり、アクションリサーチをする一番の目的であるように感じた。

・佐須奈、仁田小学校が行っている総合学習

佐須奈小中学校

☆「ふるさと学習」

小学一年生から
中学三年生に
かけ各学年がテ
ーマを決め対馬
の地域や魅力に
ついて学習する

+ α
他学科にも地域
学習の要素を盛
り込んでいる

仁田小学校

☆自発的総合学習

小学二・三年生が
毎週二時間耕作
放棄地を訪れ、地
域の人と協力し合
い一から農地へと
戻す活動を行った

+ α
伝統野菜である「仁田
芋(里芋の一種)」を栽
培しより地域の理解に
深みを増す

ESD

地元をよく知る
ことによって誇
りを持ち、地域
活性化につな
がるのでは...

・小学校での平和学習

昭和45年に長崎に原爆が投下された日である8月9日は、毎年長崎県内の全小中学校で平和集会が行われており、今回は私たちもそれに参加させていただいた。長崎大学のナガサキ・ユース代表団のPeace Caravan隊の3人の原爆に関する発表と6年生の原爆についての発表を全校生徒や先生方とともに聞いた。その後の平和集会では平和記念式のTV中継を視聴し、原爆の投下された午前11時2分に全員で1分間の黙とうを行った。関東圏に住む私たちは原爆の悲痛さを身をもって感じ、考えさせられる機会になった。

考察

以上のような多くのリサーチ活動を経て、私たち学生は、対馬の抱える課題やそれらの実態を知ることができ、それをどう解決していくか考えさせられた。しかし、それと同時に対馬の魅力である豊かな自然や人々の温かさを身をもって感じられる良い機会であった。このアクションリサーチは現地に行かなくては体験できない、感じられない多くのことを学ぶことを可能にし、その経験を加味して、そこにある素材を活かし、その地域の直面している課題の解決法を考えることができるのではないだろうか。これこそがアクションリサーチの意義であり、実際に体験した私たちが感じたことである。